横芝の碑（その二十三）

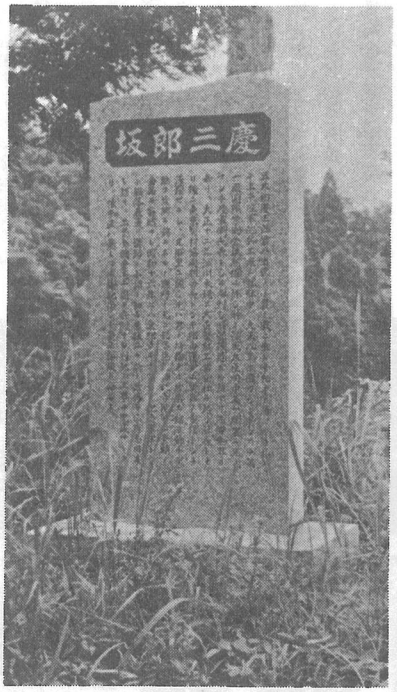
大総の二宮金次郎

〈慶三郎坂の碑〉

旧大総村遠山に慶三郎坂と呼んでいる坂があります。

安産のお守りで有名なお阿弥陀様の山門前の舗装道路を左へ約二〇〇メートル行った所の角を右に曲るとすぐ急坂になり、数軒の人家と切通しの様な崖の間を二〇〇メートル程上ると突然前方が開け、ここが峠です。ここから下りになり、生い繁る山林地帯を過ぎた道は、松尾町に入ります。この峠の道端に端正な磨きのかかった碑が建っています。これは故郷繁栄のために私財を投じてこの道路開発を遂行させた遠山出身の五木田慶三郎氏顕彰の碑なのです。

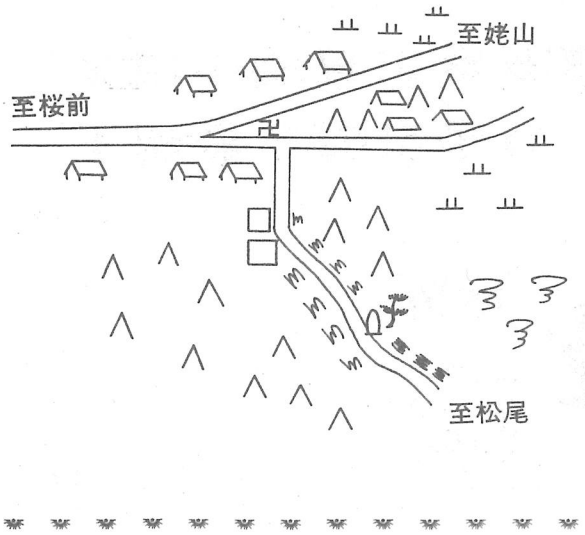
氏は幼くして父を失い、母の手一つで育てられましたが家計も余り豊かでなかったので、弟達の子守りや母の手助け等のために学校も欠席勝でした。しかし、天性の頭脳と忍耐力は衆に勝れ、常に組長、級長等に推されて他の子供達のリーダーとして人望を得ていました。その頃大総小学校長は、名教師の誉高い安塚先生でしたが、先生も慶三郎少年の才能を惜しみ県費負担による師範学校への進学を推めましたが「私が学校へ入ってしまっては、母や弟達が食べてゆけない、私はすぐに働らきに出て母を助けたい」と断って木挽職の弟子になったのです。末だ子供の域を脱しない体で、大人と一緒に斧を振い、大鋸を挽き、際間を見ては母の仕事を手伝う健気な姿を、近所の人々は「大総の二宮金次郎」と言って賞めそやしていました。



やがて、弟達も大きくなり、どうやら母の手助けもできるようになった十九歳の時、意を決して単身上京して、当時就職試験の難かしいといわれた砲兵工廠に就職しましたが、その技倆と、才能は此こでも衆に勝れ、時の陸軍大臣田中義一大将の知偶を得て大東京の木材界に君臨しましたが、母の住む故郷を愛する心は常に忘れず、大総村のチベットと言われた遠山に、私財を投じて、当時としては極めて見事な五尺巾の道路を完成させたのです。このことについて口碑には、

「五木田慶三郎君ハ当区ノ小農ノ家ニ生レ十九才の時志ヲ抱キテ上京陸軍砲兵工廠ニ就職中大正八年米国ワシントンニテ第一回国際労働会議開催ニ際シ時ノ陸軍大臣田中義一閣下ニ見込マレテ陸軍側代表トシテ参列シ帰朝後感ズル所アリテ労働界ヲ去リ大正十二年深川木場ニ大正製材工業株式会社ヲ起シ社長トナリ後ニ東京製材協同組合長トシテ組合運営ニ業界ノ重鎮トシテ活躍セラレ又郷里ニ関シテハ君ノ持論タル故郷ニ錦ヲ飾ルデ無ク故郷ヲ錦ニスル理想ノ元ニ部落施設神社寺院等ニ多額ノ金品ヲ寄贈サレ昭和十六年二ハ皇紀弐千六百年事業トシテ部落表道路ノ小峠ノ如キ急坂二ヶ所ノ改修ヲ区有志旧友ト謀リ工費金額壱千円ヲ寄附サレ別記ノ工事ヲ完成サレタリ依ツテ区ハ是レヲ感謝記念シテ慶三郎坂ト命名ス」と刻まれています。

◎写真はその碑で、表面扁額には端麗な階書で慶三郎坂と刻まれ、その下には前記の口碑が刻まれています。又脊面には「旧道急坂二ヶ所延長五百八十間、幅員五尺、工事費土地補償費金百十一円、土工費金七百七十一円、延人員五百十四人、雑費金四十八円、昭和四十八年十二月再建、再建有志、小河市郎、伊藤右仲、小川文雄、五木田正吉、　姥山旧友、土屋幸蔵　書吉田武利」等と刻まれています。

口碑の選文者だという小河市郎さんは「いわば大総の二宮金次郎という人でしたね、道路が完成した時に、すぐ記念碑を建てようとしましたが慶次郎さんが固く断られたので、木の標識を建てておきましたが御当人も故人になられたので御遺族の了解を載いてこの碑を建てたという訳です」と話してくれました。

（養護老人ホーム小沢所長寄稿）